

ずいひつ No.133

2018年7月25日発行



一途に恋する花 ひまわり

夏になると、大輪の花を咲かせるひまわり。末盛にある附属病院の花壇に植えられているのを目にしたことがあります。

ひまわりの花言葉は、「私はあなただけを見つめる」「愛慕」など恋愛にまつわるものが多くあります。

それはこちらのギリシア神話に由来するといわれています。

クリュティエは水のニンペで、アポロンに思いをかけたが、かないませんでした。それ故クリュティエは乱れ髪を肩に打ち流し、一日じゅう寒い地面に坐^{すわ}って涙に暮れていました。九日のあいだ、食べもせねば飲みもしないで坐^{すわ}っていました。自分の涙と冷たい露のみがただ一つの食べ物なのでありました。彼女は太陽（日の神なるアポロン）がさし登ってその日その日の軌道を通って日没になるまで、じっとみつめていました。他の物はなんにも見ないで、たえずアポロンばかりを見ていました。そのあいだにとうとう足が地面に根づいてしまって、顔は一つの花となりました。すなわち向日葵^{ひまわり}の花で、太陽が毎日の軌道を通っているあいだじゅう、いつもその太陽にむき合うように茎を回転させています。こうしてその花となって、クリュティエの思いを留めているのであります。
(ギリシア・ローマ神話 / ブルフィンチ作 野上弥生子訳 p.149-150 より抜粋)

これだけ読むと、恋が叶わなかった水の妖精の悲しい物語に見えますが、アポロンがクリュティエを嫌うようになったのには理由があります。

もともとクリュティエはアポロンの恋人でした。しかし、アポロンは、クリュティエを恋人とすることにすぐに飽きてしまい、美女を求めて空を走っていきました。空の上を光の馬車で駆け抜けていったアポロンは、地上に絶世の美女を見つけます。それが、ペルシア王の娘であるレウコトエでした。アポロンはたちまちレウコトエに心を奪われます。レウコトエも自分の元を訪ねてきたアポロンのあまりの神々しさに身を任せてしまいました。そのことに嫉妬したクリュティエは厳格なペルシア王の元を訪れ、『レウコトエがその色香をつかってアポロンを誘惑している。そのせいでアポロンは自分の元へ戻って来てくれない』とあることないこと密告します。気性の荒いペルシア王は淫らな娘の行動に怒り狂い、レウコトエを生き埋めにして殺してしまいました。このことを知ったアポロンは嘆き悲しみ、密告したクリュティエを嫌って二度と近づかなくなったのです。

(参照：1話5分で読めるギリシャ神話 <http://greek-myth.info/Apollon/ClytieSunflower.html>)



すべては身から出たさび、自分の起こした行動が招いた結果です。アポロンとクリュティエのどちらが悪いとはいいにくいですが。

しかし嫌われてもなお、太陽を追いかけて一途に思い続ける。一途といえば聞こえはいいですが、今で言う『ストーカー』のように薄ら寒いものを感じます。少しひまわりを見る目が変わりそうですね。
(暑さに弱い司書3年生 M)

今回参照した当館所蔵図書

ギリシア・ローマ神話 ブルフィンチ作 野上弥生子訳

楠元開架 1 F 080/2